ダイジェスト版

子どもの生活と学びに関する親子調査

2022

「子どもの生活と学び」研究プロジェクトについて ‥p.2
調査概要 ……p.3
基本属性 ……p.4

1 学校の変化……p.5
① 学校生活への意識
② 学校の授業
③ 学校でのICT機器の利用
④ ICT機器の持ち帰り

2 学びの変化……p.9
① 学習に向かう姿勢・勉強する理由
② 勉強方法
③ 将来の希望・なりたい職業

3 生活の変化……p.12
① 親子のかかわり
② 親子の会話
③ 子どもの生活時間
④ 子どものメディア利用
⑤ 子どもの経験・保護者自身の活動
⑥ 教育費・子どもの教育への意識

4 意識の変化……p.18
① ICT機器を使った学習の効果と影響
② 社会観

ISS 東京大学社会科学研究所　ベネッセ教育総合研究所

「子どもの生活と学び」研究プロジェクトについて

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所は、2014年1月に、「子どもの生活と学び」の実態を明らかにする共同研究プロジェクトを立ち上げました。
本ダイジェスト版では、この研究プロジェクトの一環として行った調査結果を載せています。

研究プロジェクトの特徴

1. 小学1年生から高校3年生の「現在」と「時代変化」をとらえることができる

本研究プロジェクトでは、小学1年生から高校3年生の子どもとその保護者に対して、毎年継続して調査を実施しています。これにより、12学年にわたる子どもの生活や学び、保護者の子育ての実態などの「現在」の様子(1時点の学年による違い)を明らかにできます(図中①)。また、経年比較により、子どもと保護者の「時代変化」をみることができます(図中②)。

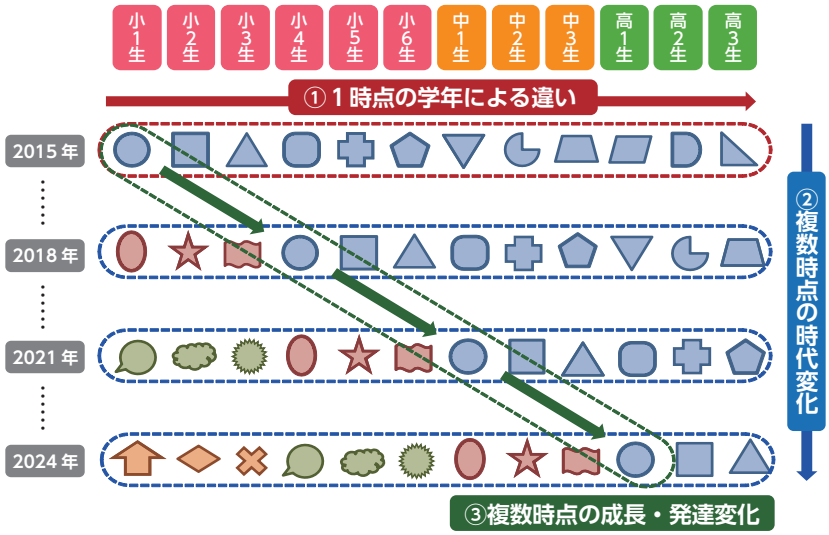
2. 親子の「成長・発達」のプロセスをとらえることができる(親子パネルデータ分析)

また、本研究プロジェクトでは、同じ子どもとその保護者を継続して調査しています。これにより、子どもが毎年どのように成長・発達していくのか、また、それによって保護者のかかわりや意識はどのように変化するのかといった、同じ親子の「成長・発達」の様子や因果関係を明らかにすることができます(図中③)。

3. 子どもの生活と学びにかかわる意識や実態を、幅広く詳細にとらえることができる

子どもを対象にした調査では、生活、学習、人間関係、価値観、自立の程度などを幅広くたずねています。また、保護者を対象にした調査では、子どもへのかかわりや子育て・教育の意識などをたずねています。この2つの調査から、子どもと保護者の日々の生活や学習の様子を浮かび上がらせるとともに、子どもと保護者の課題に迫ります。

〈調査のイメージ〉



※ 研究プロジェクトの詳細は、最後のページで紹介しているWebサイトよりご覧ください。

[本ダイジェスト版について]

- 図表で使用している百分率(%)は、小数第2位を四捨五入して算出している。
  四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある。

調査概要

調査テーマ

子どもの生活と学習に関する意識と実態（子ども）
保護者の子育て・教育に関する意識と実態（保護者）

調査時期

2022年７～９月

調査方法

郵送にて調査をご依頼し、Webにて回答する調査

調査対象

全国の小学１年生から高校３年生の子どもとその保護者　※小学１～３年生は保護者が回答。

	全体	小１	小２	小３	小４	小５	小６	中１	中２	中３	高１	高２	高３
2019年	15,306	1,740	1,732	1,703	1,492	1,379	1,200	1,136	1,032	1,000	967	970	955
		5,175			4,071			3,168			2,892		
	【76.3%】	【88.0%】			【77.5%】			【70.4%】			【65.3%】		
2020年	15,646	1,884	1,596	1,647	1,563	1,472	1,372	1,155	1,128	1,040	921	916	952
		5,127			4,407			3,323			2,789		
	【76.6%】	【86.6%】			【78.2%】			【72.3%】			【65.5%】		
2021年	15,588	1,707	1,779	1,580	1,502	1,516	1,412	1,280	1,098	1,054	955	855	850
		5,066			4,430			3,432			2,660		
	【76.1%】	【83.8%】			【77.8%】			【71.3%】			【64.5%】		
2022年	13,398	1,649	1,489	1,578	1,209	1,202	1,253	1,073	974	875	768	693	635
		4,716			3,664			2,922			2,096		
	【63.9%】	【80.8%】			【63.9%】			【57.9%】			【48.6%】		

※数値は、各回の有効回答数。【　】内は有効回答率。

※本冊子では、各調査年の有効回答を分析対象としている。①親もしくは子どもの片方回答（小４～高３生）、②学年の回答が親と子で不一致、③調査発送時の学年と回答学年が不一致、④「在学していない」と回答したケースは、有効回答から除外している。

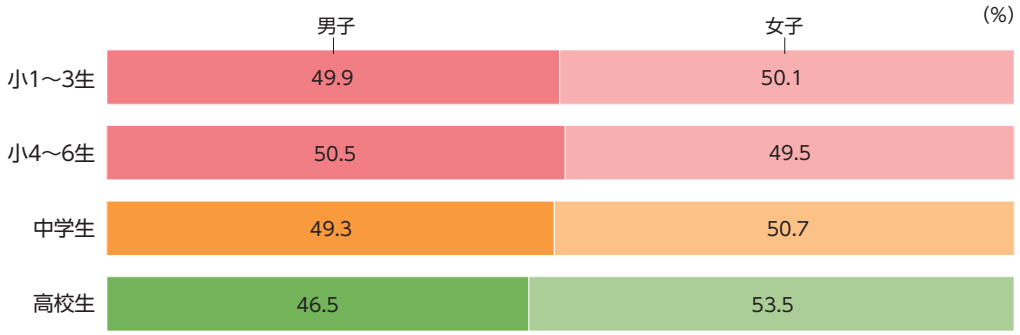
※2019年は20,056組、2020年は20,413組、2021年は20,471組、2022年は20,951組の「調査モニター」に配布した。

※調査方法を2022年よりWeb調査に変更。2015年～2021年は郵送による自記式質問紙調査で実施した（ただし2021年のみ、一部Web調査で実施）。

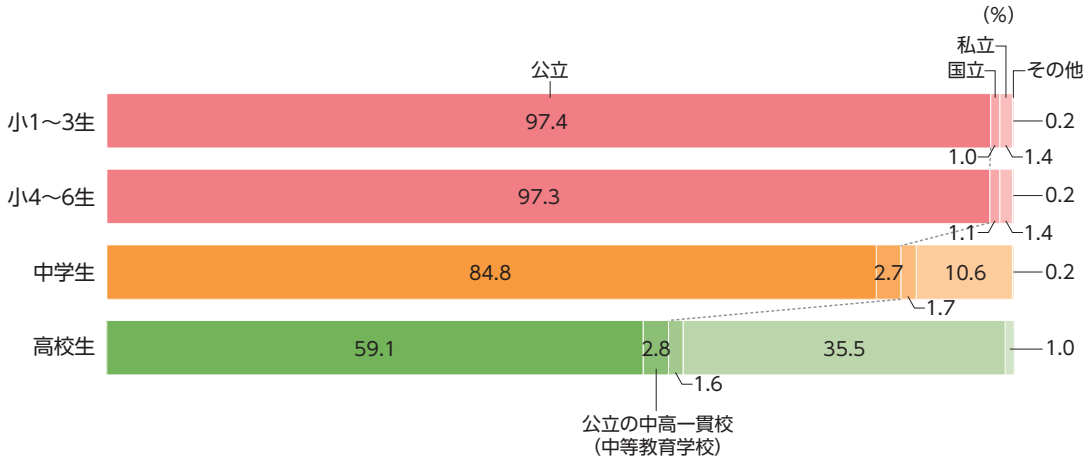
※調査方法の変更に伴い、調査年ごとの違いを同じ条件で比較するため、設問ごとに「無回答・不明」を除いた実回答数を分母として数値の算出を行った。このため、昨年（2021年度調査）までに発表した数値と異なることがある。

基本属性 2022

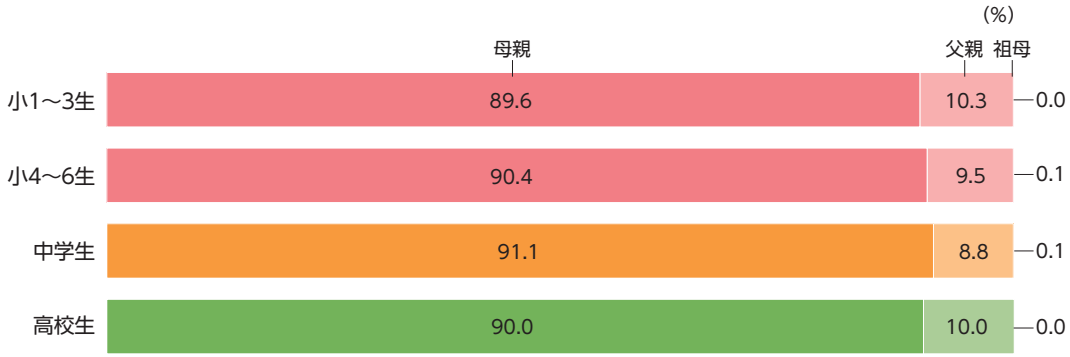
子どもの性別（学校段階別）



子どもが通っている学校の種類（学校段階別）

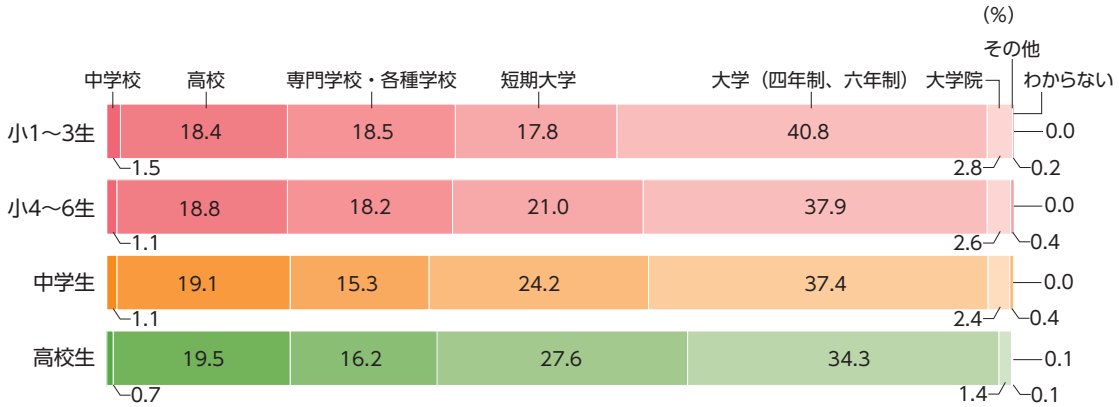


保護者（回答者）と子どもの続柄（学校段階別）



※「祖父」、「その他」は０％のため、表示していない。

母親の最終学歴（学校段階別）

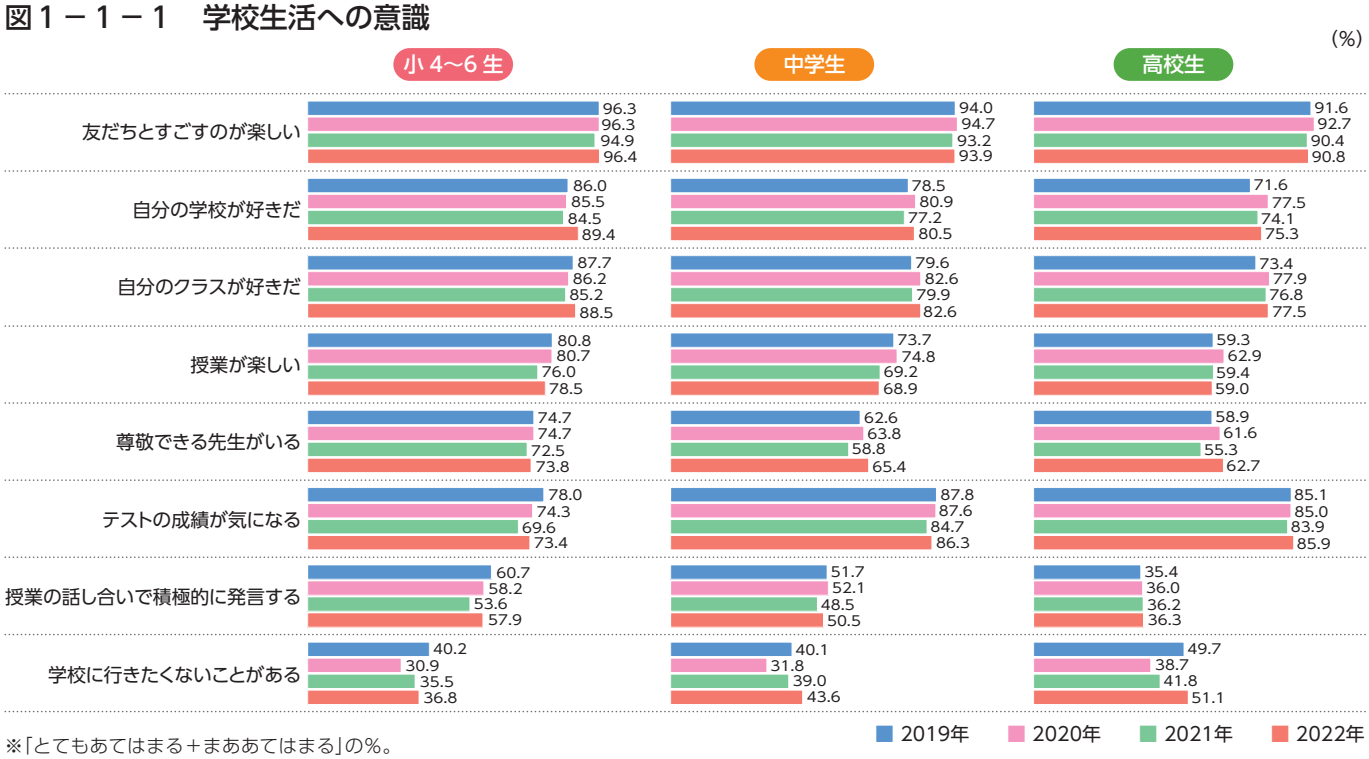


「学校に行きたくないことがある」中高生が増加

自分の学校やクラスが好きだと感じる子どもは、小学生で約９割、中高生で約８割存在する。「尊敬できる先生がいる」と回答した中高生は 2021 年から増加し、2022 年は６割を超えた。一方「学校に行きたくないことがある」中高生も 2021 年から 2022 年にかけ増加した（中学生 4.6 ポイント増、高校生 9.3 ポイント増）。学校の先生とのかかわりをみると、2019 年、2022 年ともに、どの学校段階でも約６～８割の子どもは学校の先生が「結果が悪くても努力を認めてくれる」「勉強を分かるまで教えてくれる」と回答した。

Q 学校生活について、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。 回答：子ども

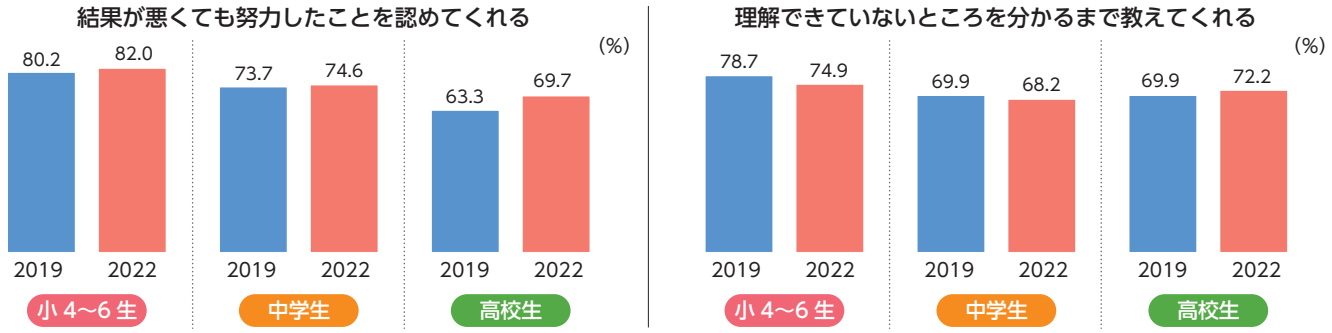
図１－１－１　学校生活への意識



※「とてもあてはまる＋まああてはまる」の%。
※ 2022年の小４～６生の数値の降順に示す。

Q 学校の先生から、言われたりしてもらったりすることとして、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。 回答：子ども

図１－１－２　学校の先生とのかかわり



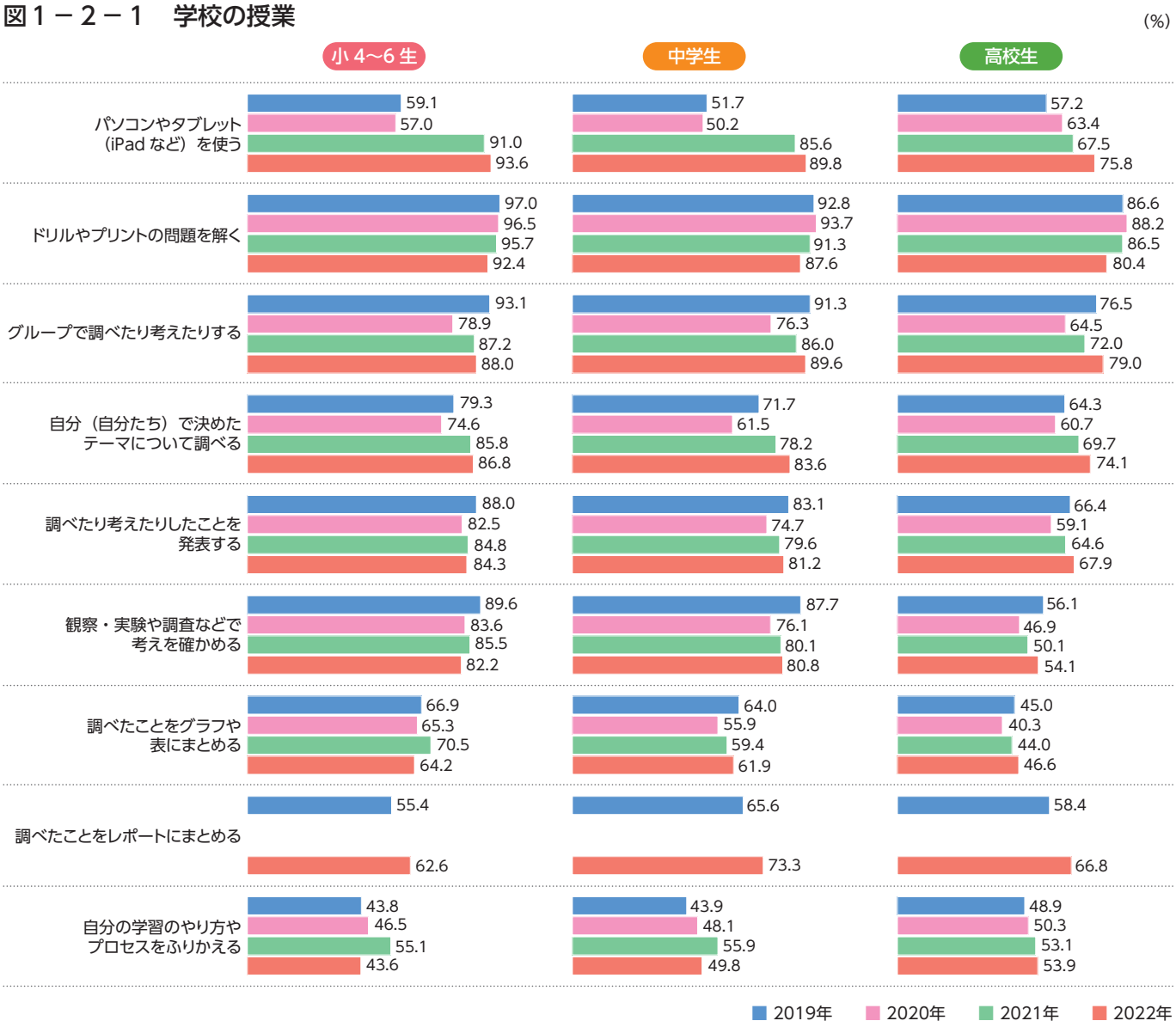
※「とてもあてはまる＋まああてはまる」の%。

小中学生で「学習のやり方やプロセスをふりかえる」授業が減少

授業の中で「パソコンやタブレットを使う」ことは2019年から2022年にかけて、とくに高校生で増加しており、一人一台端末の導入の影響がうかがえる。「自分で決めたテーマについて調べる」「調べたことをレポートにまとめる」授業はいずれの学校段階でも2019年に比べ増加し、6～8割である。一方小学校では「調べたことをグラフや表にまとめる」授業は2021年から減少した。また「自分の学習のやり方やプロセスをふりかえる」授業は2019年から2021年まで増え続け、5割を超えたが、2022年では小中学校で減少した。

Q この1年くらいの間に、学校の授業で、次のようなことはどれくらいありましたか。 回答：子ども

図1－2－1　学校の授業



※「よくあった＋ときどきあった」の%。
※「調べたことをレポートにまとめる」は2020年、2021年の調査ではたずねていない。
※2022年の小4～6生の数値の降順に示す。

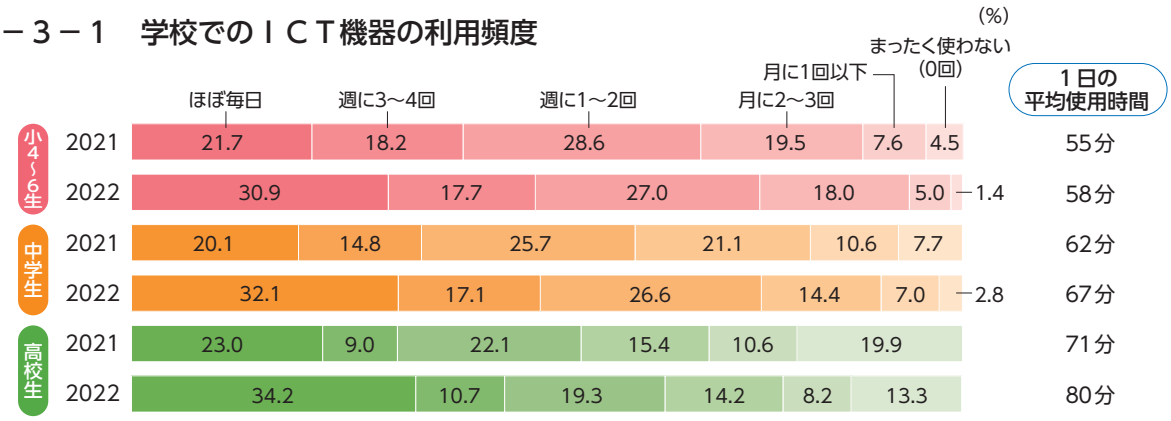
「ほぼ毎日」学校でＩＣＴ機器を使っている小中高校生は３割

2021 年から 2022 年にかけてＩＣＴ機器を使って「友だちと意見を共有する」「デジタル教科書や資料集を使う」小中高校生が増え、５割～６割となった。また「動画を見て学ぶ」（小学生）、「発表用の資料をまとめる」（小中学生）、「授業以外で使う（委員会活動・部活動など）」（中学生）、「テストを受ける」（中高生）といった使い方は 2021 年に比べ増加した。ＩＣＴ機器を活用する頻度の増加に伴い、その用途も協働的な学びや思考力や表現力の育成など、広がっていく様子がうかがえる。

Q 学校ではデジタル機器をどれくらい使っていますか。
学校ではデジタル機器を１日にどれくらいの時間使っていますか。

回答：子ども

図１－３－１　学校でのＩＣＴ機器の利用頻度

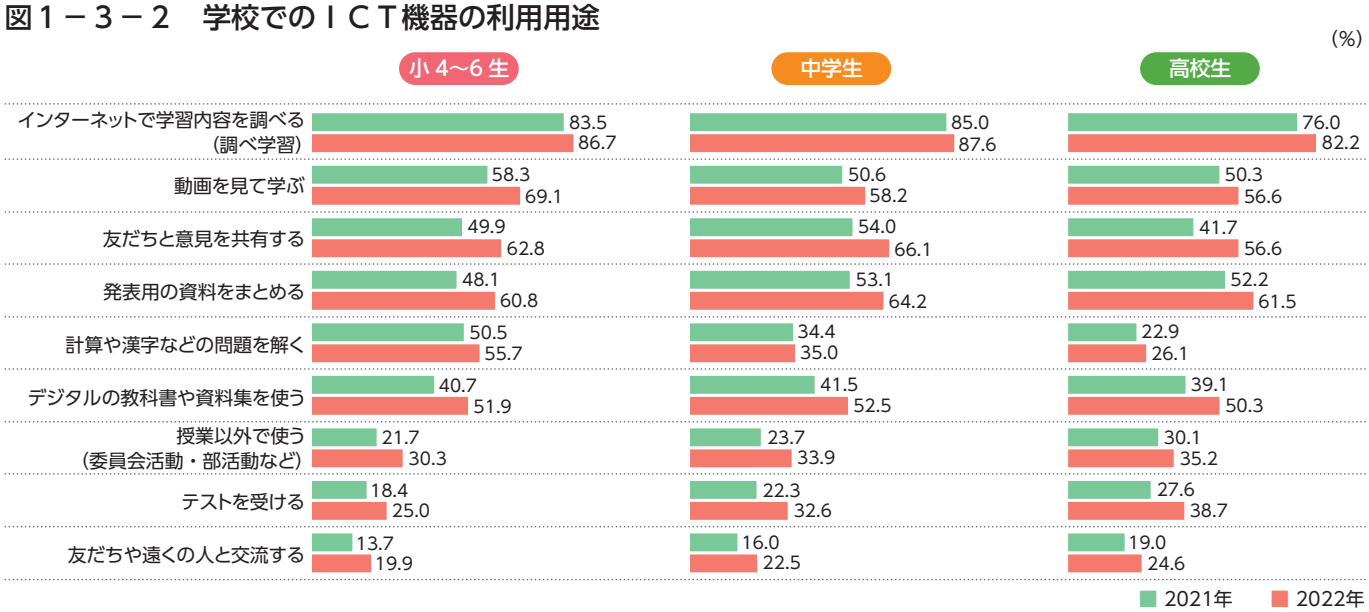


※使用時間は、学校でデジタル機器の使用が「ほぼ毎日」～「月に１回以下」と回答した人のみにたずねた。
※平均使用時間は、「30分」を「30分」、「１時間」を「60分」、「４時間」を「240分」、「４時間以上」を「270分」などと置き換えて、「無回答・不明」を除外した上で算出。

Q 学校ではデジタル機器を使って、次のようなことをどれくらいしていますか。

回答：子ども

図１－３－２　学校でのＩＣＴ機器の利用用途



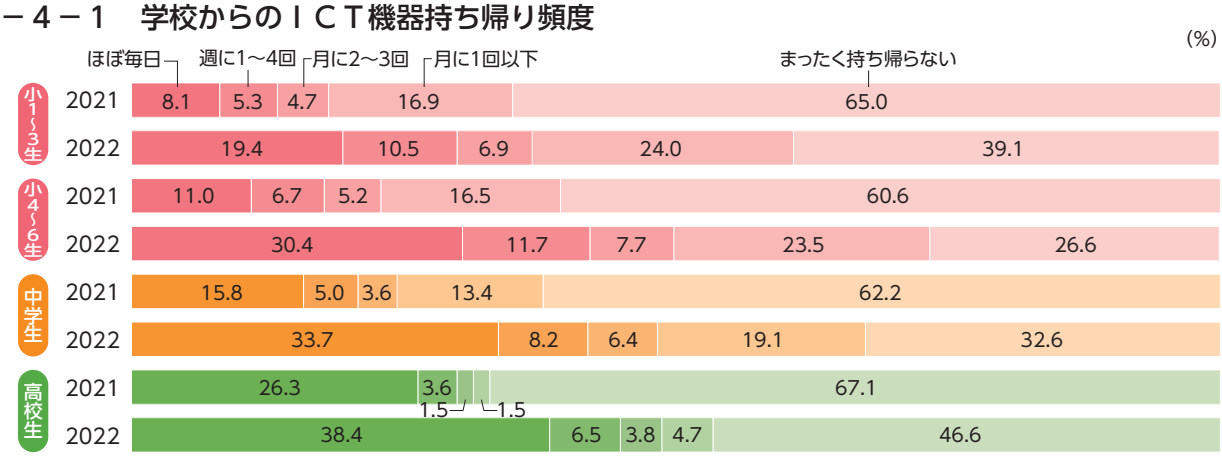
※「よくする＋ときどきする」の%。
※学校でデジタル機器の使用が「ほぼ毎日」～「月に１回以下」と回答した人のみにたずねた。
※項目は小４～６生の数値の降順に示す。

学校からＩＣＴ機器を持ち帰ることがある小中学生は６～７割

学校から、ＩＣＴ機器を「まったく持ち帰らない」割合について人口規模別にみたところ、人口が少ない地域より大都市のほうが少なく、大都市の子どものほうが持ち帰りが多いことがわかる。また、用途をみると小４生～中学生は家で学校のＩＣＴ機器を使ってのドリル学習が減少した一方で、レポートの作成や発表用資料のまとめでの利用が増加した。学校のＩＣＴ機器の持ち帰りによって、家庭学習の様子にも変化があるようだ。

Q 学校で使用するあなた専用のデジタル機器を、どれくらいの頻度で家に持ち帰っていますか。 回答：子ども

図１－４－１　学校からのＩＣＴ機器持ち帰り頻度



※「週に１～４回」は「週に１～２回」と「週に３～４回」の合計。
※小１～３生には保護者に対して、「あなた専用」を「お子様専用」にしてたずねた。

表１－４－１　学校からＩＣＴ機器を「まったく持ち帰らない」割合（人口規模別）

(%)

	小１～３生			小４～６生			中学生		
	2021	2022	2022-2021	2021	2022	2022-2021	2021	2022	2022-2021
政令指定都市・特別区	56.7	32.6	-24.1	57.7	23.6	-34.1	57.3	28.8	-28.5
15万人以上	62.2	38.3	-23.9	54.8	26.6	-28.2	59.9	31.8	-28.1
５万人～15万人未満	71.5	42.4	-29.1	64.7	26.4	-38.3	66.3	33.5	-32.8
５万人未満	79.5	50.9	-28.6	77.3	34.9	-42.4	71.9	43.1	-28.8
全体	65.0	39.1	-25.9	60.6	26.6	-34.0	62.2	32.6	-29.6

Q 家では、学校で使用するあなた専用のデジタル機器をどのように使っていますか。 回答：子ども

表１－４－２　学校から持ち帰ったＩＣＴ機器を使った家庭での学習内容

(%)

	小４～６生			中学生		
	2021	2022	2022-2021	2021	2022	2022-2021
インターネットで学習内容を調べる（調べ学習）	57.4	64.3	6.9	74.2	72.2	-2.0
計算や漢字などの問題を解く	63.8	59.0	-4.8	50.0	41.8	-8.2
発表用の資料をまとめる	32.0	40.5	8.5	48.6	54.5	5.9
動画で映像授業を見る	30.2	36.3	6.1	34.1	35.4	1.3
レポートを作成する	22.4	32.2	9.8	47.8	53.4	5.6
デジタルの教科書や資料集を使う	22.7	30.7	8.0	34.9	40.1	5.2
友だちと意見を共有する	20.2	24.1	3.9	26.2	30.4	4.2
単語や用語を暗記する	13.3	17.8	4.5	30.9	29.0	-1.9

※「よくする＋ときどきする」の%。
※持ち帰りが「ほぼ毎日」～「月に１回以下」と回答した人のみにたずねた。
※2022年の小４～６生の数値の降順に示す。

「上手な勉強のしかたがわからない」子どもが4年連続で増加

「勉強しようという気持ちがわかない」「上手な勉強のしかたがわからない」と回答した子どもは2019年から4年間増え続けている（とても＋まああてはまる）。また低学年ほど増加幅が大きく、特に小4生は2019年から20ポイント以上も増加、勉強のしかたへの不安では6割を超えた。勉強する理由をみると、「新しいことを知るのがうれしい」と感じる小中学生が若干増えたものの、しかられたくないから勉強する小中学生は2021年から増加し5割を超えた。

Q あなたは自身のことについて、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。 回答：子ども

図2－1－1　学習に向かう姿勢

勉強しようという気持ちがわかない

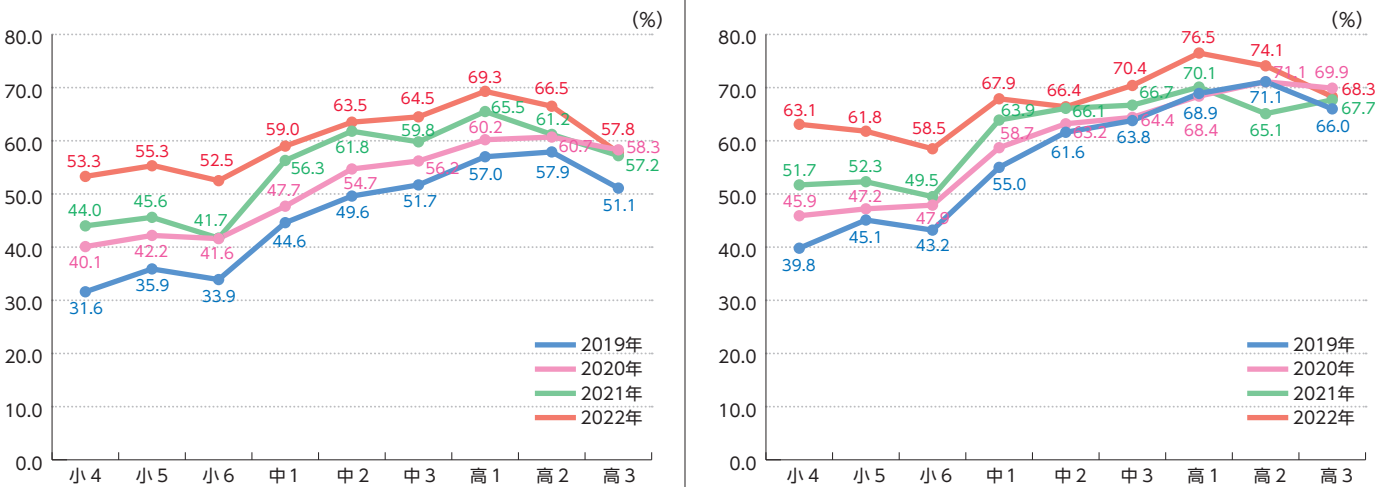
(%)

	2019	2020	2021	2022
小4～6生	33.7	41.3	43.8	53.7
中学生	48.5	52.8	59.1	62.1
高校生	55.4	59.7	61.4	64.9

上手な勉強のしかたがわからない

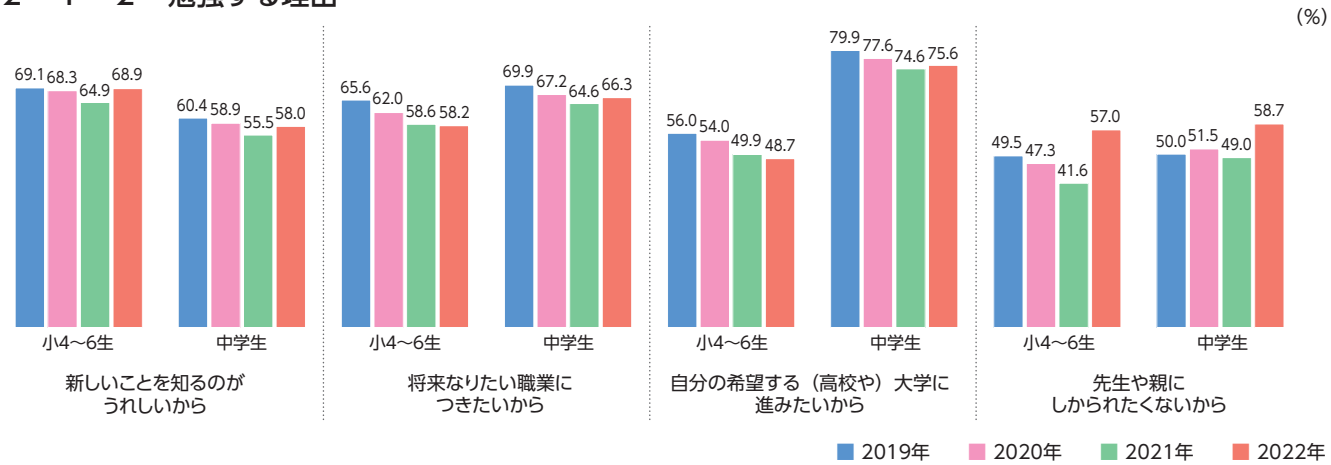
(%)

	2019	2020	2021	2022
小4～6生	42.6	46.9	51.2	61.1
中学生	60.0	62.0	65.4	68.2
高校生	68.7	69.8	67.7	73.2



Q あなたが勉強する理由について、次のことはどれくらいあてはまりますか。 回答：子ども

図2－1－2　勉強する理由



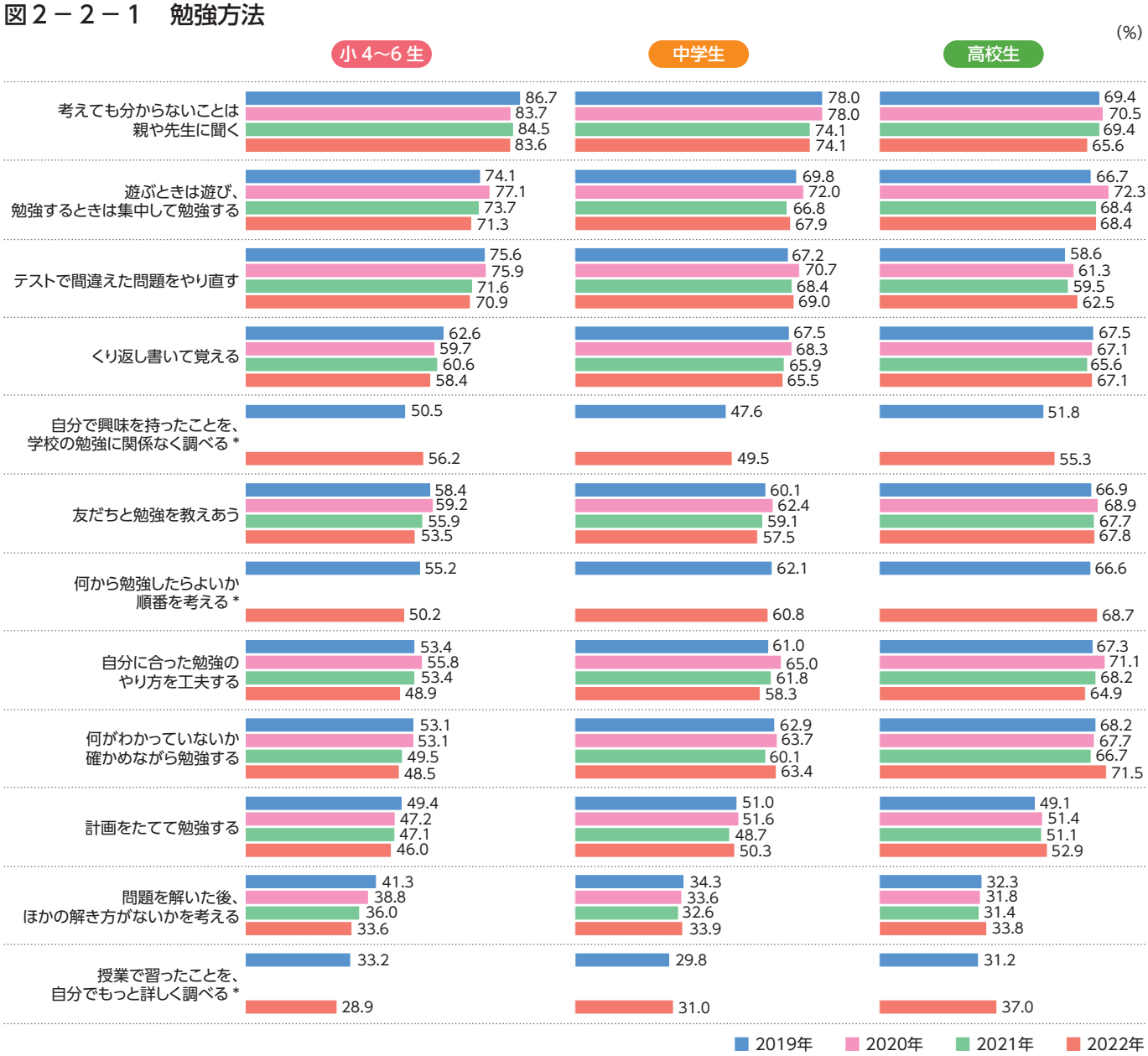
※図2－1－1、図2－1－2はともに「とてもあてはまる＋まああてはまる」の%。

「自分に合った勉強のやり方を工夫する」子どもが減少

勉強方法をみると、学校段階が低いほど多くの項目で「よく＋ときどきする」と回答した割合が減少し、減少幅も大きくなる傾向がみられた。特に小４～６生では 2019 年に比べ「問題を解いた後、ほかの解き方がないかを考える」「何から勉強したらよいか順番を考える」の減少幅が大きい。勉強方法でのこのような変化は、前頁で指摘があった子どもの学習意欲の低下や勉強方法への不安と関連があると考えられる。一方、高校生では「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」割合は増加している。

Q あなたは、勉強するときに、次のことをどれくらいしますか。　回答：子ども

図２－２－１　勉強方法



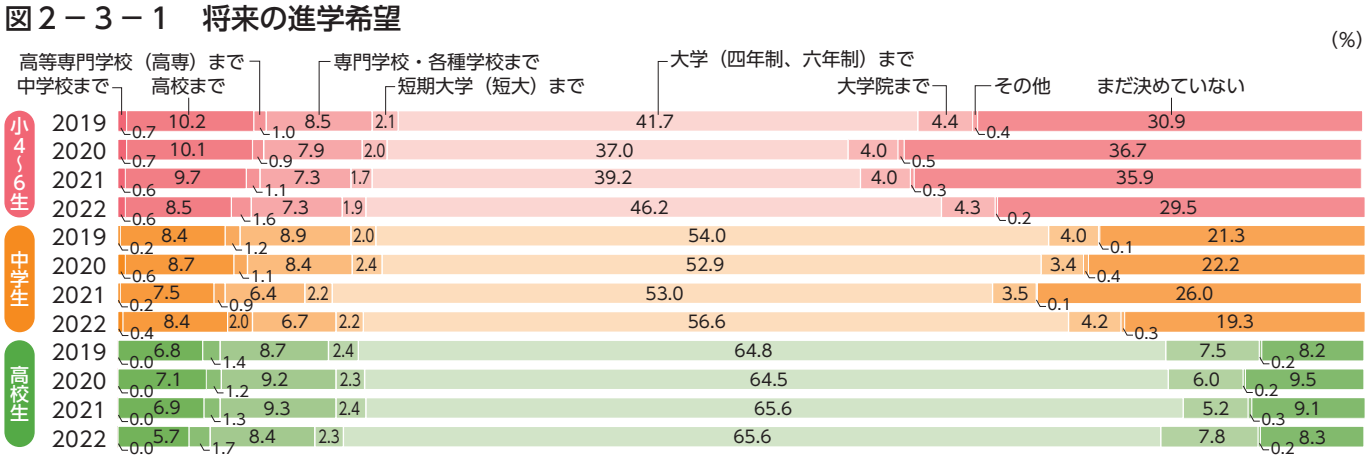
※「よくする＋ときどきする」の%。
※「*」がついている項目は、2020年、2021年の調査ではたずねていない。
※2022年の小４～６生の数値の降順に示す。

将来なりたい職業が「ある」子どもが増加

将来「大学まで」進学を希望する小中学生が 2021 年から増加傾向であると同時に「まだ決めていない」小中学生が減少傾向である。進学希望を持つ時期の早期化傾向がうかがえる。また将来なりたい職業が「ある」子どもは、どの学校段階でも 2019 年を上回り、小４～６生は６割、中高生は５割となった。成績層別にみると、いずれの成績層も将来なりたい職業が「ある」と回答した割合が増加しており、成績上位層と下位層との差が縮まっている。しかし、小学生は依然として上位層が下位層より 10 ポイント以上高い。低学齢のほうが、将来なりたい職業が「ある」ことと、いまの成績の関連が強いようだ。

Q あなたは、将来、どの学校まで進みたいと思いますか。　回答：子ども

図２－３－１　将来の進学希望



Q あなたには、将来なりたい職業（やりたい仕事）はありますか。　回答：子ども

図２－３－２　将来なりたい職業が「ある」の割合

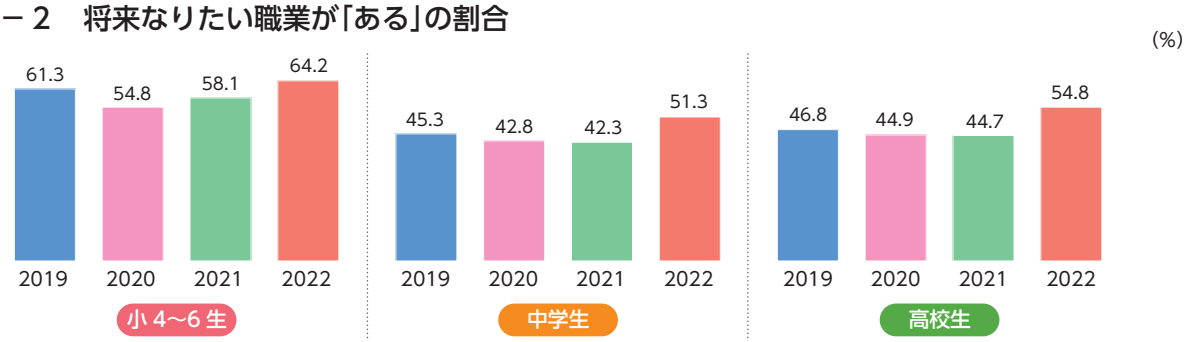


表２－３－１　将来なりたい職業が「ある」の割合（成績別）

(%)

	小４～６生				中学生				高校生			
	成績上位	成績中位	成績下位	成績上位-成績下位	成績上位	成績中位	成績下位	成績上位-成績下位	成績上位	成績中位	成績下位	成績上位-成績下位
2019	68.1	61.5	54.5	13.6	49.8	44.8	42.5	7.3	49.4	45.1	44.6	4.8
2020	62.5	54.9	48.1	14.4	45.8	44.3	39.2	6.6	49.0	44.8	40.0	9.0
2021	64.4	58.3	52.3	12.1	48.5	43.0	37.2	11.3	47.4	45.5	39.3	8.1
2022	71.0	63.9	58.5	12.5	53.1	53.3	48.6	4.5	55.9	54.2	53.6	2.3
2022-2019	2.9	2.4	4.0	—	3.3	8.5	6.1	—	6.5	9.1	9.0	—

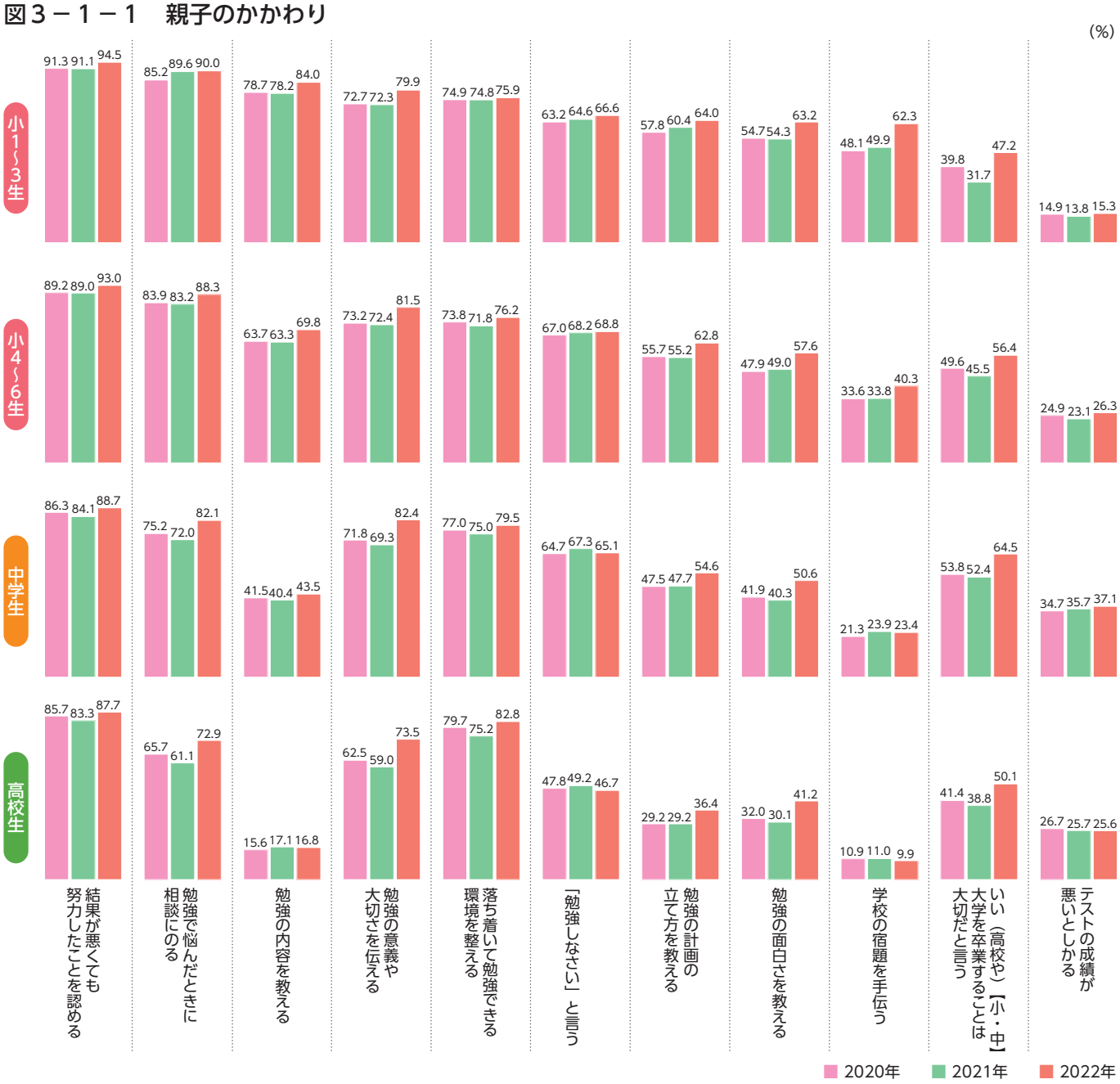
※成績の自己評価（小学生は４教科、中高生は５教科についてそれぞれ５段階で回答）の総合得点を算出し、学校段階ごとに人数が均等になるように、「成績上位」「成績中位」「成績下位」の３つに分類した。

保護者による、子どもの学習面へのかかわりが増加

2021年に比べ保護者の子どもへのかかわりが全般的に増えている。「勉強の意義や大切さを伝える」「勉強の面白さを教える」「いい（高校や）大学を卒業することは大切だと言う」はどの学校段階でも増加した。このほか、小学生では「勉強の内容を教える」、中高生では「勉強で悩んだときに相談にのる」、高校生では「落ち着いて勉強できる環境を整える」といったかかわりも増え、子どもの発達に合わせたかかわりをしている保護者の様子がうかがえる。

Q お子様の勉強に対するあなたのかかわりについて、次のことはどれくらいあてはまりますか。 回答：保護者

図3－1－1　親子のかかわり



※「とてもあてはまる＋まああてはまる」の%。
※2022年小1～3生の数値の降順に示す。

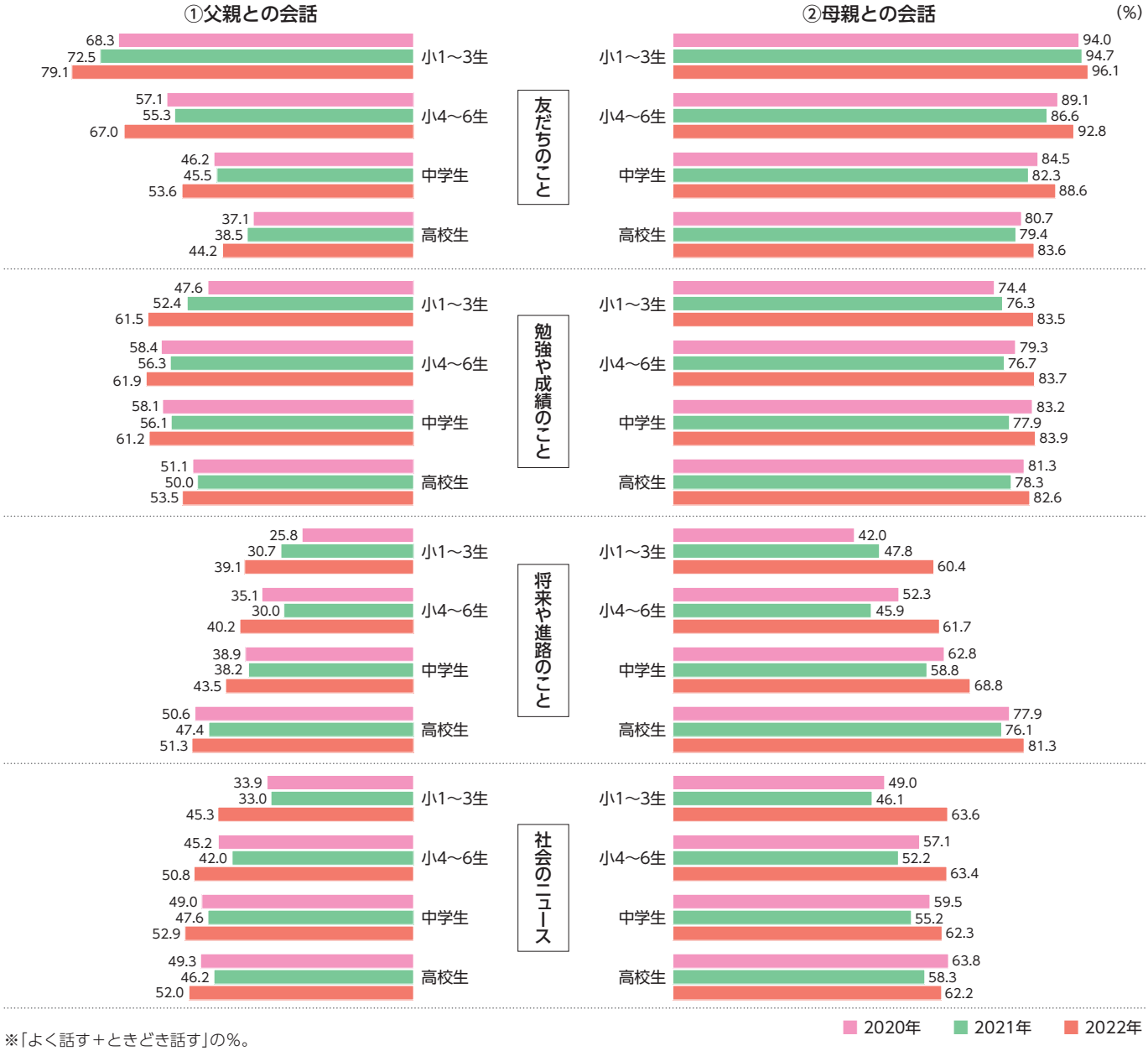
親子での会話が全体的に増加

2020 年から 2021 年にかけて、小４生以上では父親・母親と会話する頻度が減少したが、2021 年から 2022 年にかけては勉強や成績、将来の進路、社会のニュースなど、全般的に親子の会話が増えている。父親との会話をみると、どの学校段階でも友だちのことに関する話が多くなった。また小１～３生において増加の幅が大きいことが特徴的だ。父親に比べ、母親との会話は以前より多い傾向だが、2022 年は小学生で母親との会話頻度がさらに大きく増加した。日常的に子どもと密にかかわる熱心な保護者の姿が垣間みえる。

Q ふだん、お父さんやお母さんと、次のことについてどれくらい話をしますか。

小１～３生：回答：保護者　小４以上：回答：子ども

図３－２－１　親子の会話



※「よく話す＋ときどき話す」の%。
※小１～３生については、保護者には「調査の対象となっているお子様はふだん、調査の対象となっているお子様のお父さんやお母さんと、次のことについてどれくらい話をしますか」とたずねた。

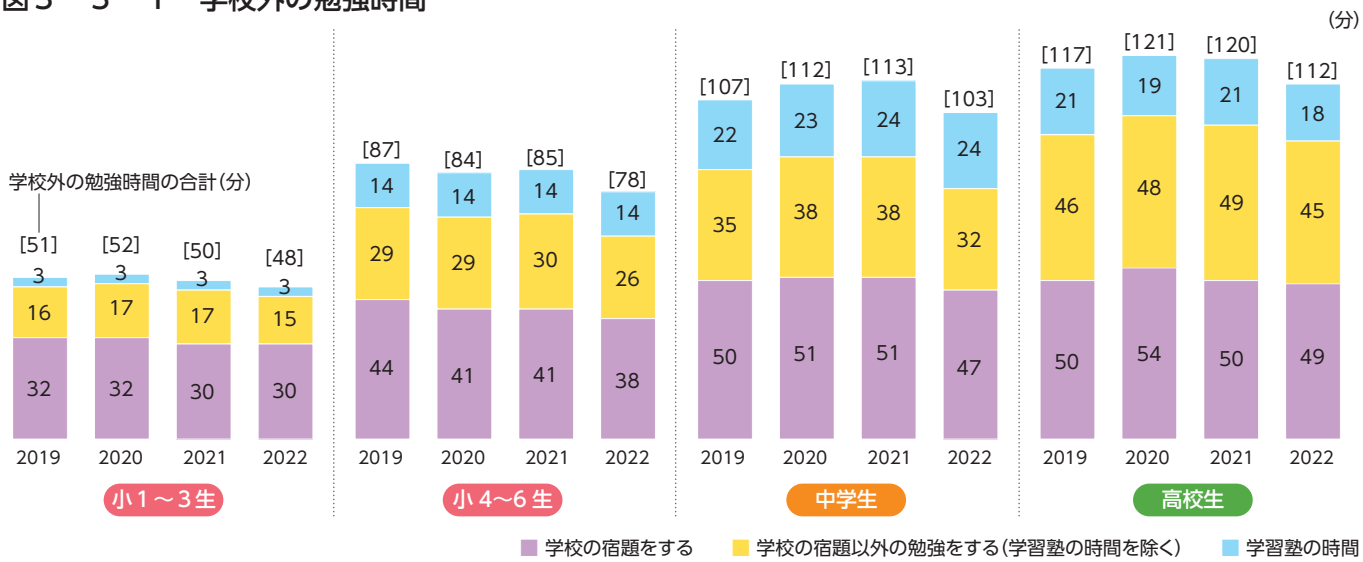
学校外の勉強時間が減少、中学生のスマートフォンの使用時間が増え続けている

学校外の勉強時間は（学校の宿題＋学校の宿題以外の勉強＋学習塾）、特に小４生以上では 2020 年、2021 年と比べ、2022 年は減少している（2022 年小４～６生 78 分、中学生 103 分、高校生 112 分）。また 2022 年は 2021 年と比べ全体的にメディアの使用時間は減少したが、中学生の「携帯電話やスマートフォン」の使用時間は 2019 年から増加し続けている。一方で、運動やスポーツをする時間は、小中学生では 2021 年に比べ減少した。さらに、2021 年と比べ１人ですごす時間、家族とすごす時間はどの学校段階でも減少に転じ、コロナ禍による行動制限緩和の影響がうかがえる。

Q あなたはふだん（学校がある日）、次のことを、１日にどれくらいの時間やっていますか。

小１～３生：回答：保護者　小４以上：回答：子ども

図３－３－１　学校外の勉強時間



※平均時間は、「しない」を「０分」、「４時間」を「240分」、「４時間以上」を「300分」などと置き換えて、「無回答・不明」を除外した上で算出。（表３－３－１も同様）
※「学習塾の時間」の平均時間は、「通っていない」と回答した子どもを０分、「通っている」と回答した子どものうち「１回にどれくらいの時間、勉強していますか」という質問に対して、「30分」を30分、「１時間」を60分、「４時間」を240 分、「４時間以上」を270 分のように置き換え、週あたりの通塾回数をかけあわせて７で割って算出した。

表３－３－１　生活時間

回答：子ども

(分)

		小４～６生					中学生					高校生				
		2019	2020	2021	2022	2022-2019	2019	2020	2021	2022	2022-2019	2019	2020	2021	2022	2022-2019
メディア	テレビやDVDを見る	89	88	88	73	-16	78	75	72	59	-19	59	54	53	42	-17
	テレビゲームや携帯ゲーム機で遊ぶ	53	65	66	55	2	52	60	63	54	2	47	49	49	42	-5
	携帯電話やスマートフォンを使う	23	27	30	30	7	66	74	82	86	20	120	127	135	134	14
	パソコンやタブレット（iPadなど）を使う	24	29	31	30	6	29	33	36	34	5	23	29	33	37	14
読書	本を読む	21	22	21	17	-4	17	17	17	16	-1	13	12	11	12	-1
	マンガや雑誌を読む	15	18	18	14	-1	14	14	15	12	-2	12	11	11	11	-1
	新聞を読む	2	2	2	2	0	2	2	2	2	0	2	2	2	2	0
運動	運動やスポーツをする（習い事を除く）	29	29	30	20	-9	20	20	20	18	-2	12	13	13	14	2
１人や人とすごす	友だちと遊ぶ・すごす	76	72	70	50	-26	54	49	49	37	-17	55	54	55	41	-14
	家族とすごす	237	245	242	206	-31	191	192	195	166	-25	132	140	147	130	-2
	自分１人ですごす	44	43	48	42	-2	81	89	93	88	7	120	126	131	130	10

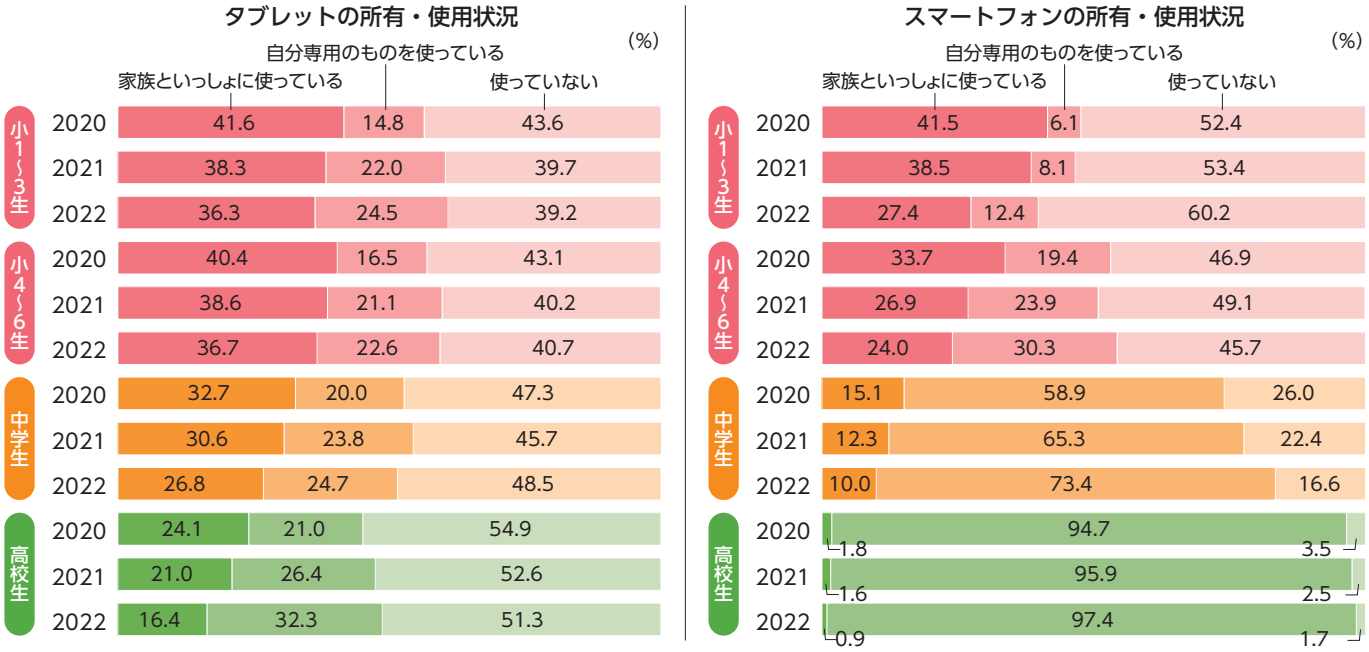
自分専用のタブレットやスマートフォンを持つ子どもが増加

自分専用のスマートフォンの所有率をみると、2020 年から 2022 年にかけて、小４～６生、中学生の増加幅が大きい。2022 年で自分専用のスマートフォンを所有する小１～３生は 12.4%、小４～６生は 30.3%、中学生は 73.4%、高校生は 97.4% となる。また３割の高校生は自分専用のタブレットを持っていることもわかった。また学校の宿題で「週に１～２回」以上利用する小中学生は２割前後と 2020 年に比べ増加しており、高校生では約３割となる。

Q あなたは、次のようなデジタル機器を、家で使っていますか。

小１～３生：回答：保護者　小４以上：回答：子ども

図３－４－１　子どものＩＣＴ機器の所有率

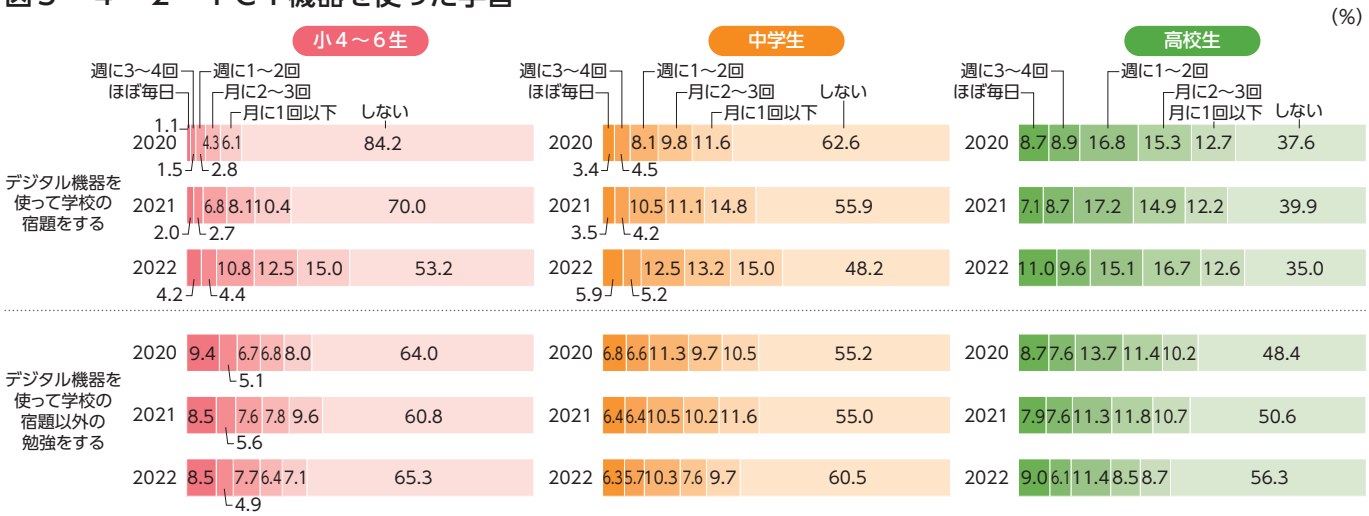


※小１～３生には保護者に対して、「自分専用」と「子ども専用」にしてたずねた。

Q あなたはふだん（学校がある日）、次のことをするために、デジタル機器をどれくらい使っていますか。学校の中でやる時間は除いてください。

回答：子ども

図３－４－２　ＩＣＴ機器を使った学習



家族旅行、地域行事への参加の経験が増加

この１年に経験したことを選択する設問をみると、2019 年に比べ「疑問に思ったことを自分で深く調べる」はどの学校段階でも増加している。小４生以上では「親から仕事の楽しさや大変さを聞く」、中高生では「自分の進路（将来）について深く考える」経験も増加傾向にある。コロナ禍による活動制限が時間の余裕を生み、自分の進路を深く考える機会がたくさん得られたのかもしれない。保護者自身の活動では、「環境問題に関心をもつ」「自分の能力を高めるための勉強をする」は 2020 年に比べ大幅に増加した。社会に関心をもち、自己研鑽にも熱心な保護者の様子がうかがえる。

Q この１年くらいの間に、あなたは次のようなことを経験しましたか。

小１～３生：回答：保護者　小４以上：回答：子ども

表３－５－１　子どものさまざまな経験

(%)

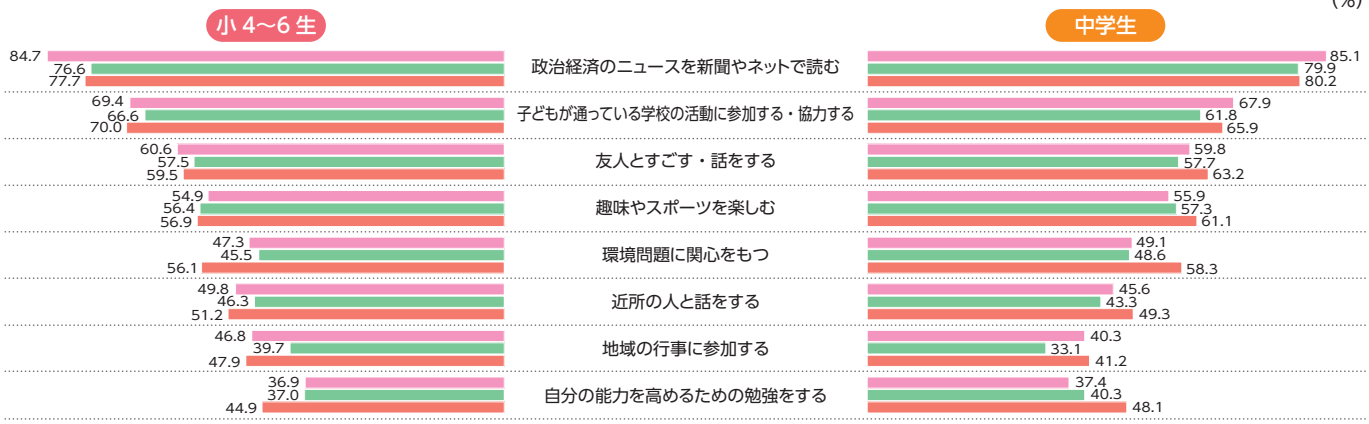
	小１～３生				小４～６生				中学生				高校生			
	2019	2021	2022	2022-2019	2019	2021	2022	2022-2019	2019	2021	2022	2022-2019	2019	2021	2022	2022-2019
家族で旅行をする	85.2	53.0	71.3	-13.9	79.5	49.6	65.1	-14.4	68.9	37.8	55.4	-13.5	54.1	25.2	43.5	-10.6
自然の中で思いっきり遊ぶ	78.3	69.6	76.8	-1.5	60.1	55.0	61.1	1.0	39.1	36.0	40.5	1.4	27.0	23.9	29.6	2.6
美術館や博物館に行く	40.5	23.7	36.5	-4.0	41.2	23.1	35.8	-5.4	28.8	16.0	25.8	-3.0	22.7	11.5	23.3	0.6
家で季節の行事をする（クリスマスや節分など）	95.0	91.0	93.6	-1.4	84.8	81.9	86.1	1.3	75.6	72.2	76.9	1.3	62.0	60.9	66.4	4.4
スポーツ観戦に行く	30.9	11.9	21.9	-9.0	32.2	13.7	23.7	-8.5	30.4	12.9	20.0	-10.4	28.1	11.7	21.5	-6.6
地域の行事に参加する（夏祭りなど）	92.0	26.6	52.2	-39.8	81.3	29.7	44.8	-36.5	62.8	14.7	31.9	-30.9	38.7	6.9	23.8	-14.9
ボランティア活動に参加する	64.0	54.6			17.6	8.5	11.7	-5.9	20.4	10.9	12.5	-7.9	19.5	9.4	11.5	-8.0
小さい子どもの世話をする（近所の子どもも含む）			55.6		48.2	41.2	40.7	-7.5	33.6	24.6	27.5	-6.1	25.7	16.2	19.5	-6.2
お年寄りの世話をする（手伝いや介護など）					18.3	10.9	16.8	-1.5	14.2	10.1	13.1	-1.1	13.8	8.0	14.3	0.5
親から仕事の楽しさや大変さを聞く					46.0	40.0	51.9	5.9	35.1	34.7	44.1	9.0	33.0	33.8	41.0	8.0
自分の進路（将来）について深く考える					28.1	24.8	27.9	-0.2	39.9	43.1	43.2	3.3	63.5	68.6	68.6	5.1
疑問に思ったことを自分で深く調べる	25.5	21.0	32.9	7.4	23.8	29.1	31.4	7.6	22.1	30.6	30.7	8.6	24.0	34.0	31.2	7.2
無理だと思うようなことに挑戦する					33.9	27.0	26.0	-7.9	22.7	22.1	20.7	-2.0	17.5	17.2	20.3	2.8

※複数回答。
※小１～３生には保護者に対してたずねた。斜線の箇所は質問していない。

Q あなたはふだん、次のようなことがどれくらいありますか。　回答：保護者

図３－５－１　保護者自身の活動

(%)



※「よくある＋ときどきある」の%。

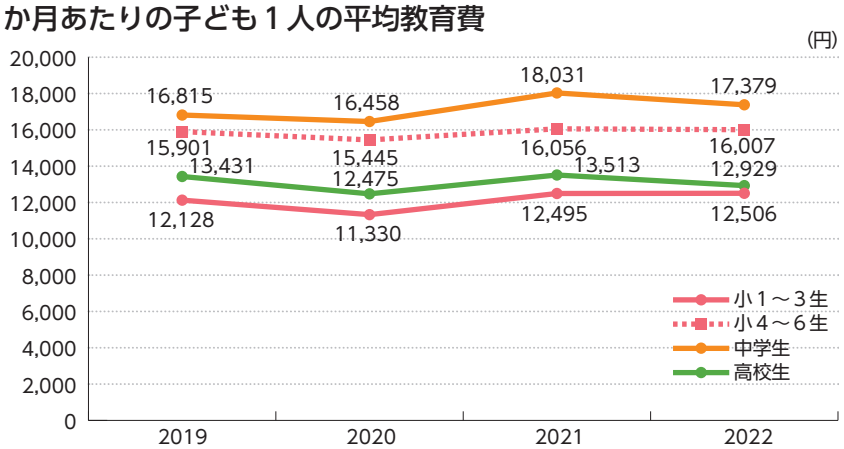
2021年に比べ中高生1人あたり1か月の平均教育費が微減、子どもの勉強や将来への不安を抱える保護者が増加

2020年から2021年にかけて増加がみられた子ども1人1か月の平均教育費は、2021年から2022年にかけて再び減少に転じている。一方で、教育意識をみると全般的に熱心な保護者が増加しているようだ。「できるだけいい大学に入れるように成績を上げてほしい」と考える小中高校生がいる保護者は2021年で5～6割だったが、2022年は6～7割弱にのぼる。また「子どもが大人になったとき自立できるか不安である」と感じる保護者は5割から6割前後に増加しており、子どもの勉強や将来に対する保護者の不安が膨らんでいる様子が見て取れる。

Q ご家庭の教育費はどれくらいですか（習い事や学習塾の費用、教材費などの合計。学校の授業料は除きます）。

回答：保護者

図3－6－1　1か月あたりの子ども1人の平均教育費

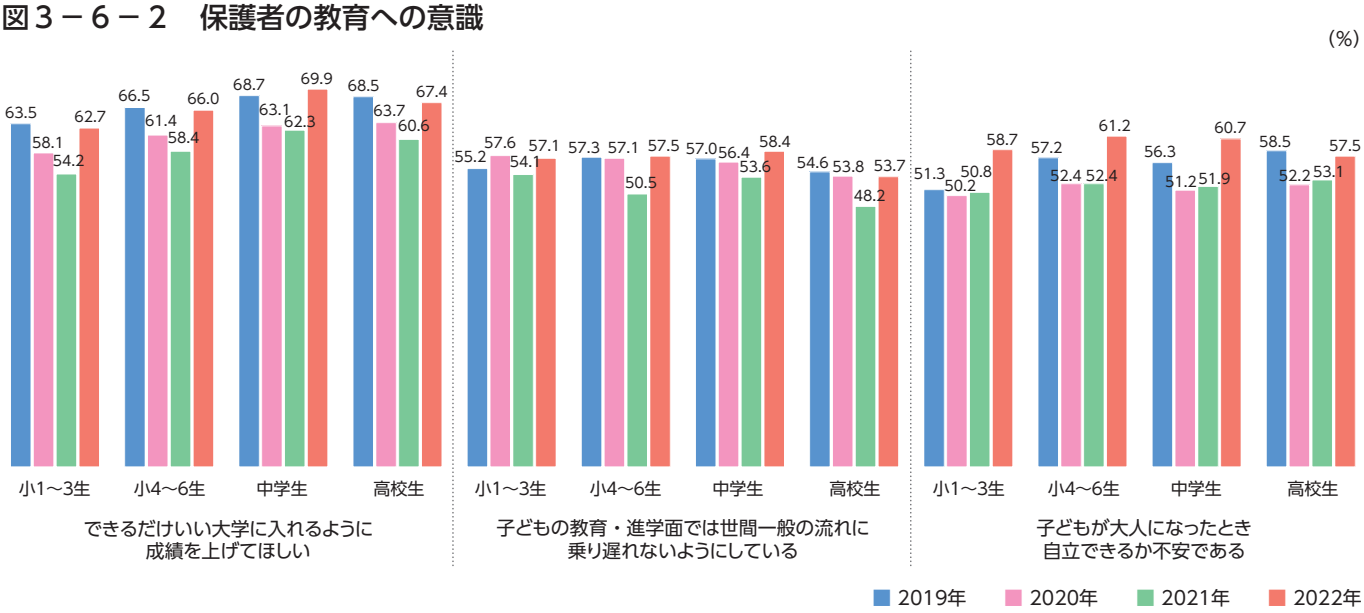


※平均教育費は「1,000円未満」を500円、「5,000円～10,000円未満」を7,500円、「50,000円以上」を52,500円のように置き換えて、「無回答・不明」を除外した上で算出。

Q お子様の教育について、次のことはどれくらいあてはまりますか。

回答：保護者

図3－6－2　保護者の教育への意識



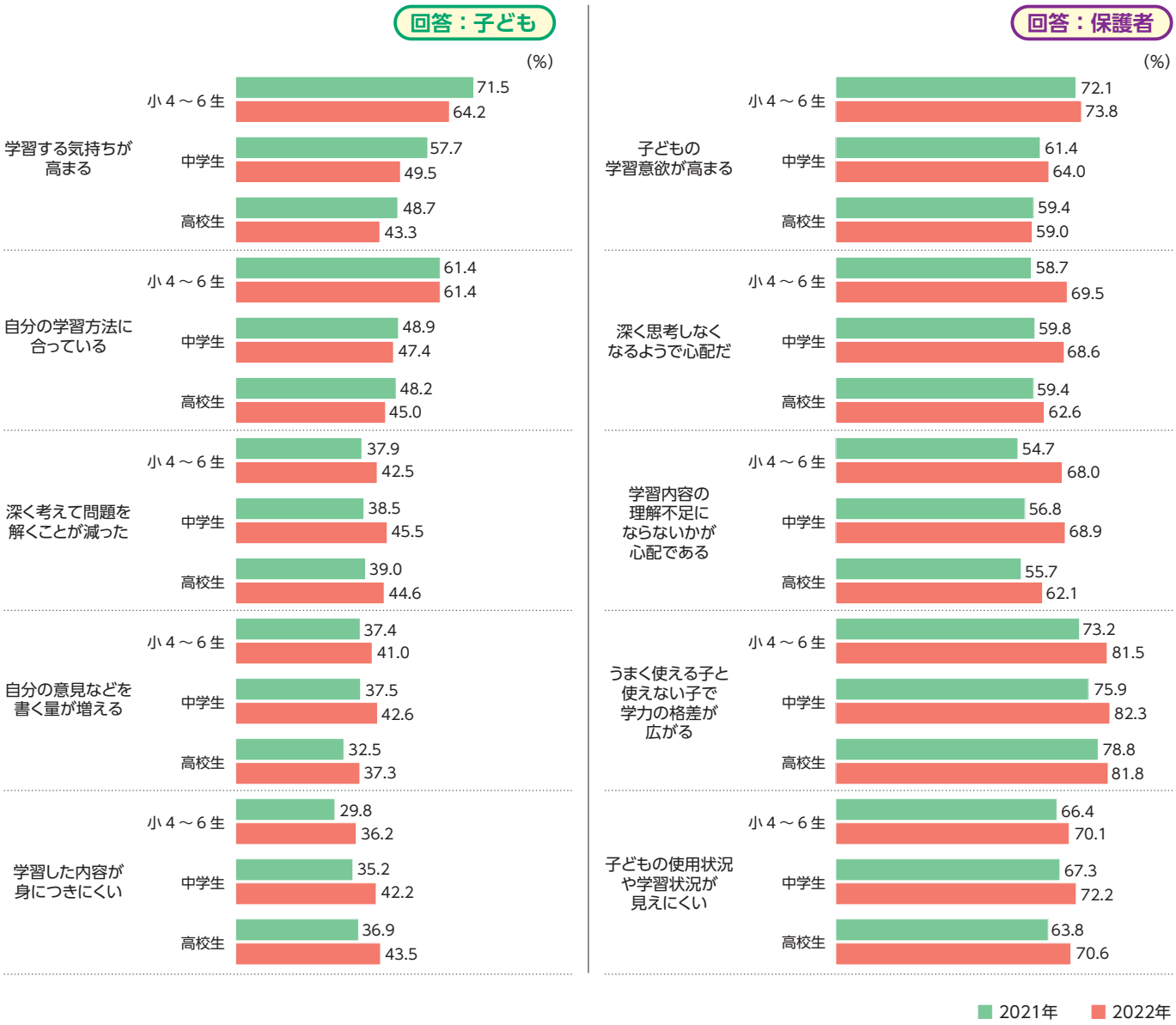
※「とてもあてはまる＋まああてはまる」の%。

ＩＣＴ機器を使った学習は「内容理解や深い思考が不足する」と考える親子が増加

ＩＣＴ機器を使った学習の効果と影響をどうとらえているかみたところ、「学習する気持ちが高まる」と感じる小中高校生は減少した。また、2022 年は約３～４割の子どもが「学習した内容が身につきにくい」「深く考えて問題を解くことが減った」と回答し、2021 年と比べ増加している。保護者の意識をみると、学習内容の理解不足に対する不安や、深く思考できないこと、子どもの学力格差の拡大を心配する保護者が増えている。ＩＣＴ機器活用の広まりにより生じた子どもと保護者の懸念をどう払しょくしていけるかが、今後の課題だろう。

Q デジタル機器を使った学習は、紙での学習に比べて、どのように感じますか。

図４－１－１　ＩＣＴ機器を使った学習の効果と影響



※「とてもそう思う＋まあそう思う」の%。

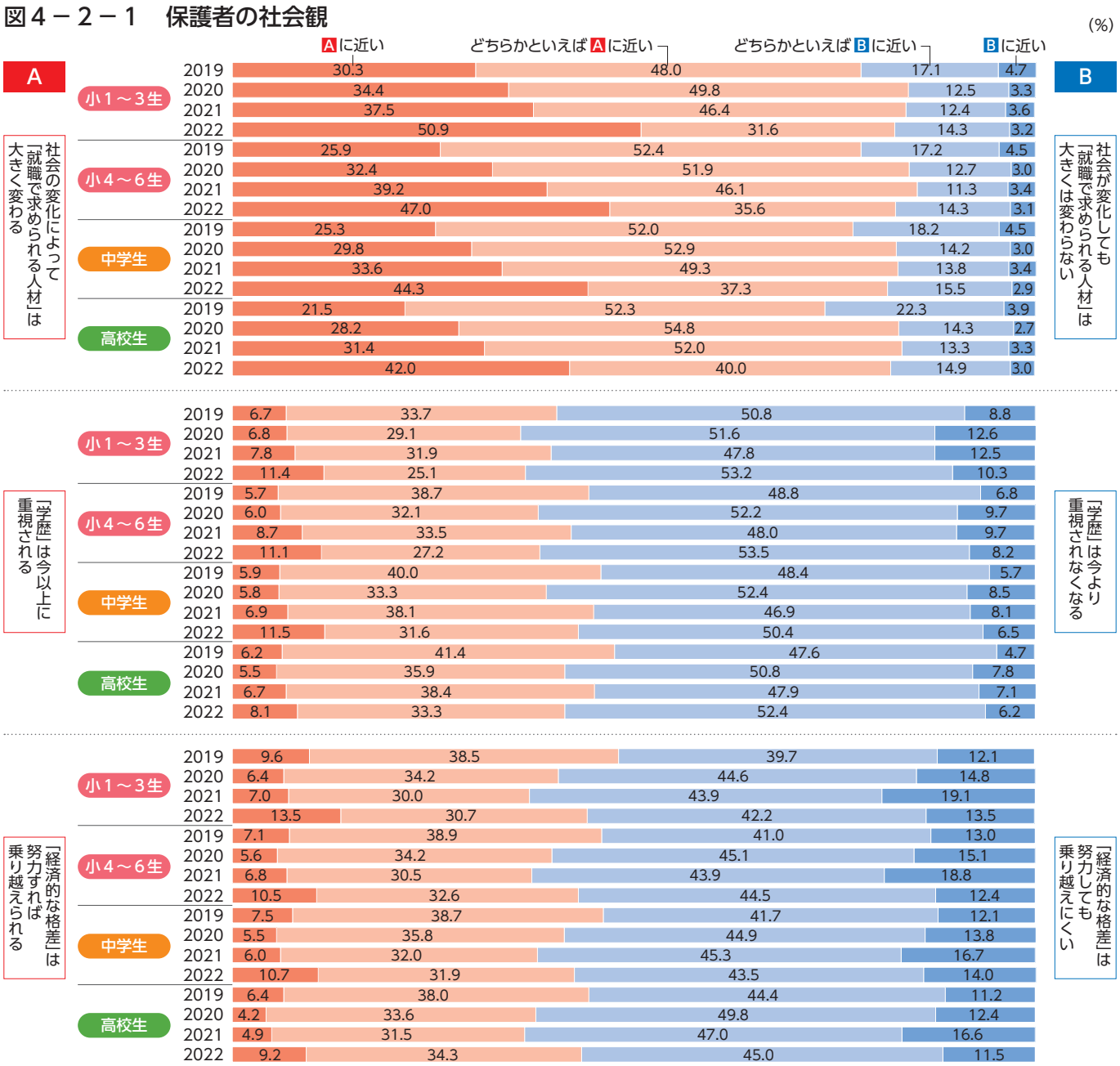
社会で求める人材が大きく変わると考える保護者が増加

学校段階が低いほど「社会の変化によって『就職で求められる人材』は大きく変わる」と考える保護者が多くなり、小１～３生では半数を超えた（「【Ａ】に近い」％）。「『学歴』は今以上に重視される」と考える保護者は 2021 年に比べて減少し、３～４割（「【Ａ】に近い＋どちらかといえば【Ａ】に近い」％）になった。またどの学校段階でも「『経済的な格差』は努力しても乗り越えにくい」と考える保護者は 2019 年から 2021 年にかけて６割（「【Ｂ】に近い＋どちらかといえば【Ｂ】に近い」％）に増えたが、2022 年では減少に転じ、５割程度である。変わりつつある保護者の社会観が子どもの教育に与える影響を注視していきたい。

Q 今後の社会について、あなたの考えをお聞きします。ＡとＢの２つの意見のうち、あなたの考えに近いのはどちらですか。

回答：保護者

図４－２－１　保護者の社会観



東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所 共同研究

「子どもの生活と学び」研究プロジェクト

調査企画・分析メンバー

プロジェクト代表者

佐藤 香（東京大学社会科学研究所 教授）

野澤 雄樹（ベネッセ教育総合研究所 所長）

耳塚 寛明（お茶の水女子大学 名誉教授、青山学院大学 客員教授）
秋田 喜代美（学習院大学 教授、東京大学 名誉教授）
松下 佳代（京都大学 教授）
石田 浩（東京大学社会科学研究所 特別教授）
藤原 翔（東京大学社会科学研究所 准教授）
大野 志郎（東京大学社会科学研究所 特任准教授）
大﨑 裕子（立教大学 特任准教授）

木村 治生（ベネッセ教育総合研究所 主席研究員）
松本 留奈（ベネッセ教育総合研究所 主任研究員）
岡部 悟志（ベネッセ教育総合研究所 主任研究員）
中島 功滋（ベネッセ教育総合研究所 主任研究員）
劉 愛萍（ベネッセ教育総合研究所 主任研究員）
朝永 昌孝（ベネッセ教育総合研究所 研究員）
大内 初枝（ベネッセ教育総合研究所 研究スタッフ）
渡邉 未央（ベネッセ教育総合研究所 研究スタッフ）

※調査票検討・調査基盤の持続性ワーキンググループメンバー
須藤 康介（明星大学 准教授）
小野田 亮介（山梨大学 准教授）
山口 泰史（帝京大学 元助教）

※所属・肩書きは、2023年４月時のものです。

研究プロジェクト Web サイトのご案内

ベネッセ教育総合研究所
https://berd.benesse.jp/

東京大学社会科学研究所
https://web.iss.u-tokyo.ac.jp/clal/

「子どもの生活と学びに関する親子調査2022」ダイジェスト版

発　行　日：2023年４月11日
発　行　人：野澤 雄樹
編　集　人：木村 治生
発　行　所：㈱ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
編 集 協 力：邵勤風

0HNB03
©Benesse Educational Research and Development Institute
無断転載を禁じます。